

【研究論文】

ときがわ町の子どもたちと遊び

—都幾川中学校アンケートから—

島田 恵司

要 旨

この報告は、埼玉県ときがわ町に住む中学生に対して行ったアンケート調査の概要である。町の山間地に住む中学生に対して、日常的な遊び、地域への愛着、居住への満足などをアンケート調査した。調査を行ったのは、島田ゼミがときがわ町において、活性化の支援を行っているためである。調査の結果、中学生たちは、多くがゲームで遊び、自然の中で遊ぶ子は少ないことがわかった。また、地域の自然に愛着を持つ生徒には、地域に継続して居住することを希望する傾向がみられた。

キーワード

ときがわ町 山間地 遊び ゲーム 自然への愛着
継続居住

ABSTRACT

This report is an outline of the questionnaire survey that goes to the junior high school students who live in Saitama Prefecture Tokigawa town. Everyday play, the attachment to the area, the satisfaction to habitation, etc. were investigated to the students who live in a place-between-mountains place of Tokigawa town. It investigated because The Shimada seminar was supporting regional vitalization in Tokigawa town. Although many junior high school students were playing the game, there were few who play in nature. The students who have attachment to the natural environment of the area had the tendency to wish to reside in this area continuously.

KEYWORDS

Tokigawa town, place-between-mountains place, game, attachment to the nature, continuous habitation

1. はじめに

ときがわ町は、首都圏の北西約 60 キロ、埼玉県の中央部からやや西に位置する人口約 1 万 3 千人のまちである。平成の大合併期の 2006 年に玉川村と都幾川村が合併してできた経緯がある。就業人口約 7,000 人のうち、第一次産業従事者は 300 人ほどであるが、町の森林率が 70.3% という数値が示すように地形的には山間地ということができらるだろう。

島田ゼミは、2009 年からこの町の活性化を支援する取組みを進めている。2010 年からは埼玉県から「ふるさと支援隊」に認定され、植林や竹伐り、祭りの支援、さらにホームステイと各家庭へのボランティアなどを行っている。

ゼミ活動の一環として、地域の未来を担う子供たちの意識を探ろうと考え、町に二つある中学校のうちの一つ、都幾川中学校の生徒たちにアンケート調査を行った。今回は、この地域に住む中学生の学校外における日常生活、特に「遊び」から、地域への愛着意識、居住への満足度などを調査した。本報告は、その調査の結果である。

2. 調査方法の概要

(1) 対象

都幾川中学校 3 年生、63 名 (男子 33 名、女子 30 名)

(2) 調査日時

2010 年 11 月

(3) 調査主体

大東文化大学環境創造学部 島田ゼミ

(4) 調査方法

アンケートの素案を、島田ゼミの学生・教員で作成し、中学校教員の皆さんと協議の上、内容を確定した。配布・回収は、都幾川中学校の教員の皆さんにお願いした。

3. ときがわ町大柵地区のこと

現在、日本の多くの町村が過疎に苦しんでいる。ときがわ町も首都圏近郊に位置しているものの、通勤圏からは外れているため、同様の状況にある。特に、旧都幾川村は、<図表 1>にあるように、人口減少が進んでいる。

島田ゼミが主に支援を行っている地区は、旧都幾川村の最西端にあたる大柵地区である。昭和

の大合併（1955（昭和 30）年）で都幾川村ができるまでは、「大柵村」という独立した村であった。地区には小学校も二つあったが共に 2004 年に廃校となり、現在はやや東寄り

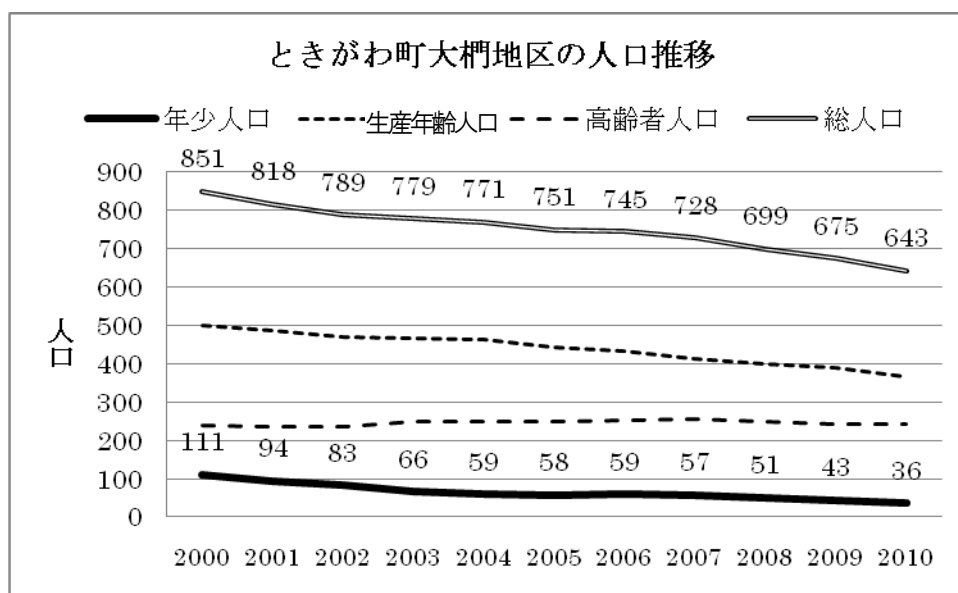
<図表1> ときがわ町の人口（ときがわ町 HP より）

年	ときがわ町全体	旧都幾川村	旧玉川村
1990	13,489	8,224	5,265
2005	13,271	6,851	5,494

（中心部寄り）の西平地区にある萩ヶ丘小学校に統合されている。

大柵地区の人口減少は、旧都幾川村の中でも特に著しい。<図表 2>は、大柵地区の近年 10 年間の人口推移である。人口全体は、851 人から 643 人と 208 人も減少している。生産年齢人口の減少も著しいが、ここでは、人口 15 歳未満の年少人口の減少に注目しておきたい。111 人から 36 人へと 75 人、率にすると 67.6%もの減少である。あと二十年余で、年少者はいなくなってしまうかもしれない。

<図表2>



地域の人々は、若者たちが地域に戻ってくることを、子どもたちが地域に残り続けてくれることを心から望んでいる。ゼミの学生たちが、ホームステイを行って聞きとりをした結果、それを痛いほど知ることができた。しかし、当の子どもたちは、どう考えているのだろうか。中学生へのアンケートをしようと考えた直接の契機は、そうしたことであった。

4. 調査結果の概要

(1) 調査対象の属性

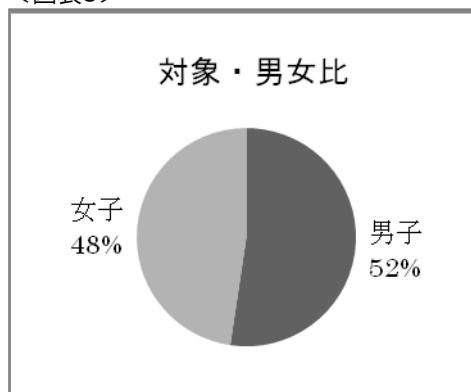
今回調査に協力していただいた生徒は、都幾川中学校3年生在籍者の63名である。男女の内訳は、男子が33名、女子は30名であった<図表3>。

都幾川中学校の校区は、ときがわ町の西半分にあたり、14地区(番匠、馬場、関堀、瀬戸元上、瀬戸元下、本郷、桃木、大附、田中、別所、雲河原、西平、大野、櫛平)に分かれる。このうち、どこに住んでいるかを生徒自身に選んでもらった。

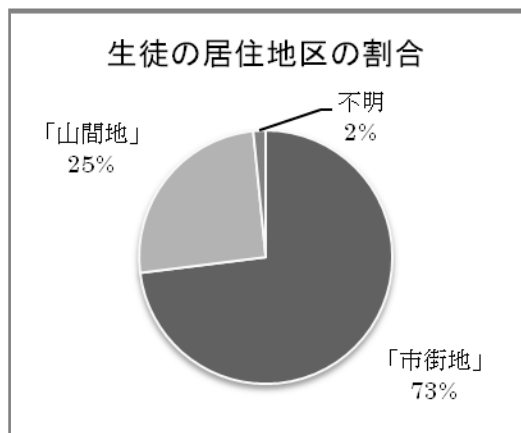
本報告では、これらの地区のうち比較的人口の集中している、番匠、馬場、関堀、瀬戸元上、瀬戸元下、本郷、桃木、大附、田中、別所の10地区を、仮に「市街地」と呼び、雲河原、西平、大野、櫛平の4地区を、やはり、仮に「山間地」と呼んで集計を行った。

「市街地」には46名、「山間地」には16名の生徒が住んでいる<図表4>。

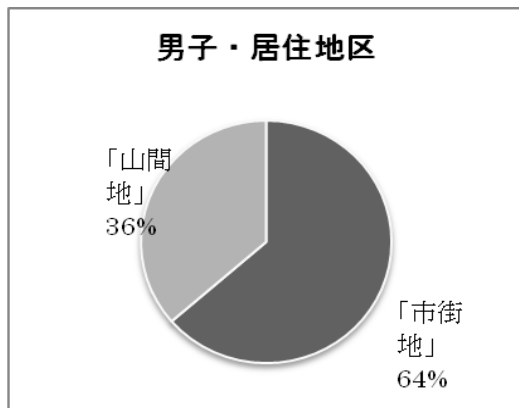
<図表3>



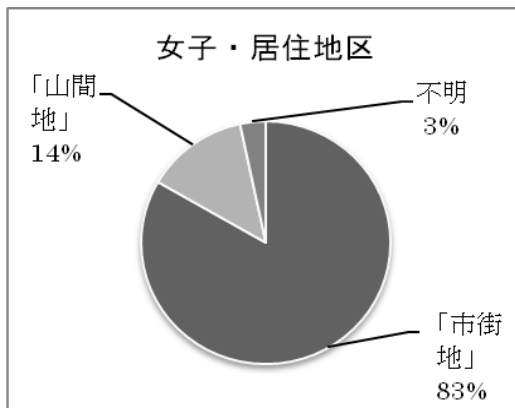
<図表4>



<図表5>



<図表6>



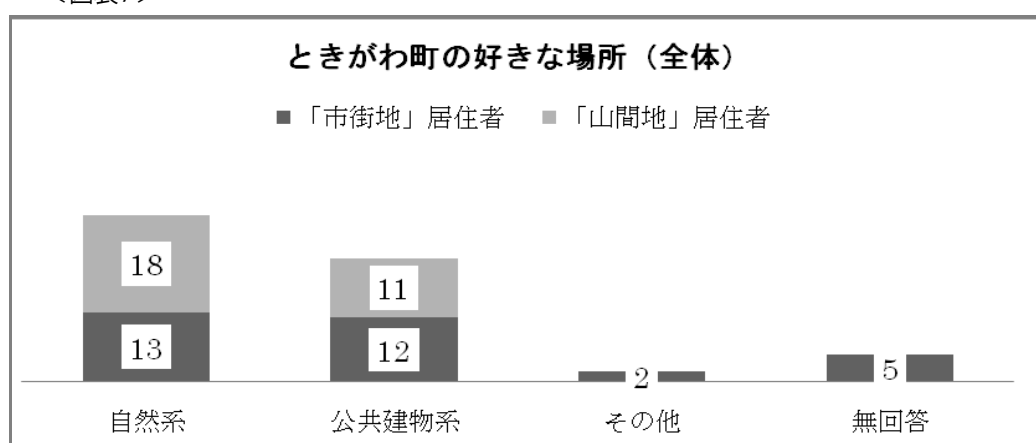
* 「市街地」居住者では女子が多く、反対に「山間地」居住者では男子が比較的多い。このため、全体集計にはこの点の留意が必要である。

男女別では、男子が、「市街地」21名、「山間地」12名、女子が「市街地」25名、「山間地」4名であった（女子1名は居住地区不明のため、集計から外した）。その結果、男女比、及び、居住地区の属性は図表のとおりであった<図表5および6>。

(2) アンケート結果の概要1 — 町内のどこが好きで、何をして遊んでいるか

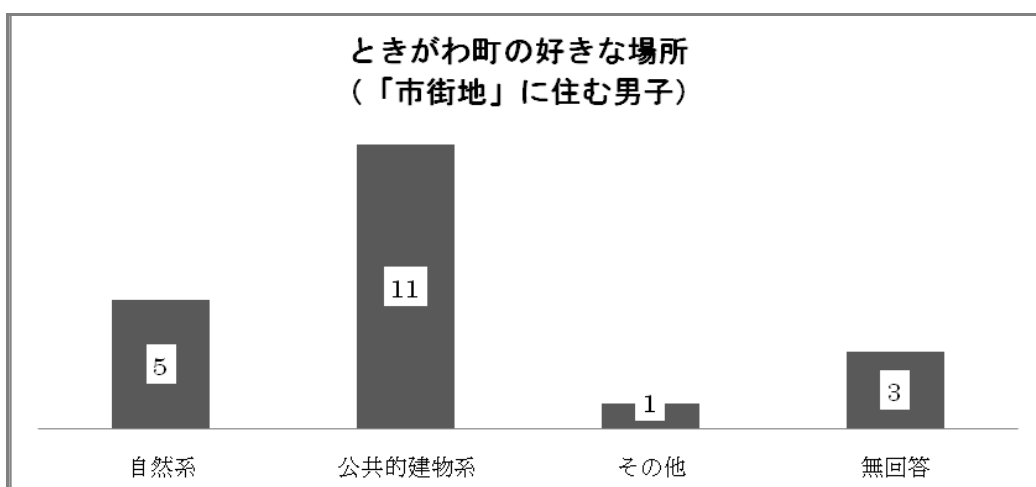
生徒たちに「町内の好きな場所」を自由回答で尋ねたところ、川や山など自然に関わる場所（「自然系」とする）を回答した生徒と、体育施設や図書館など公共的な建物（「公共建物系」とする）を回答した生徒に大きく分かれた<図表7>。

<図表7>

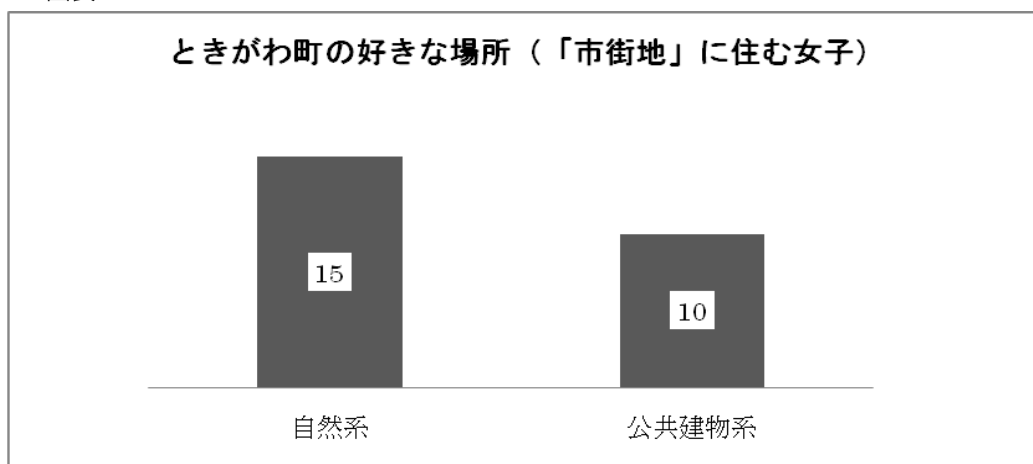


特に「市街地」に住む生徒は、男子が公共建物系の場所を挙げ、女子が自然系の場所を回答し、大きく分かれた。「市街地」の男子が挙げた施設は、12名中11名が、複合的体育施設（体育センター）である「せせらぎホール」で、1名が図書館であった。「市街地」の女子が挙げた自然系の

<図表8>



<図表9>

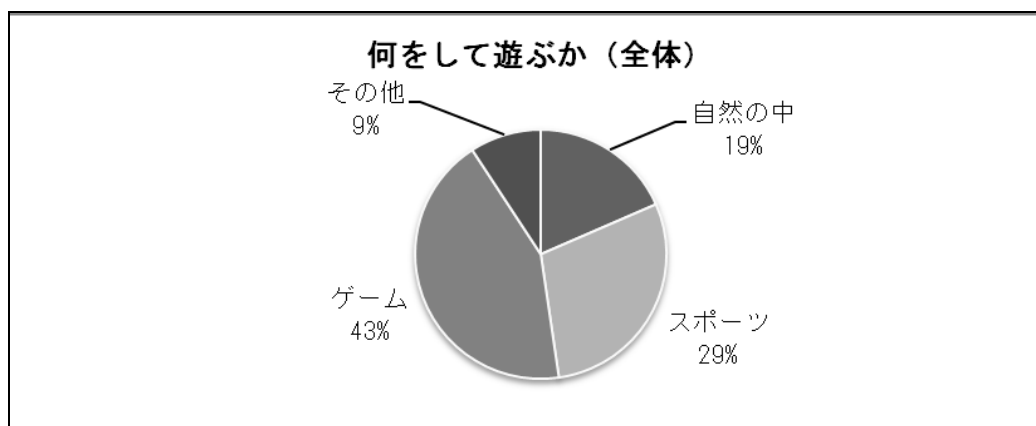


場所は、「男鹿岩」「明神淵」「愛宕山」「関掘の芝桜畑」などであった<図表8および9>。

近年、子どもたちが、外で遊ばなくなったと言われる⁽¹⁾。自然豊かな、ときがわ町では、どうなのであろう。

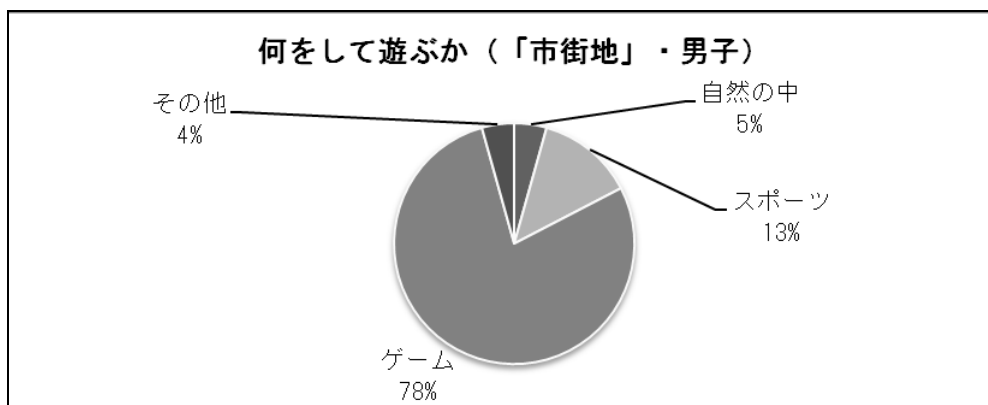
「何をして遊んでいるか」を尋ねたところ、「ゲーム」との回答が43%にのぼり、「スポーツ」は29%、「自然の中」は19%に過ぎなかった<図表10>。特に、「市街地」の男子は、78%と圧倒的に「ゲーム」である<図表11>。しかし、「山間地」の男子も12名中4名（33%）が「ゲーム」で遊んでおり、「自然の中」で遊ぶと答えたのは2名（17%）に過ぎなかった<図表12>。

<図表10>

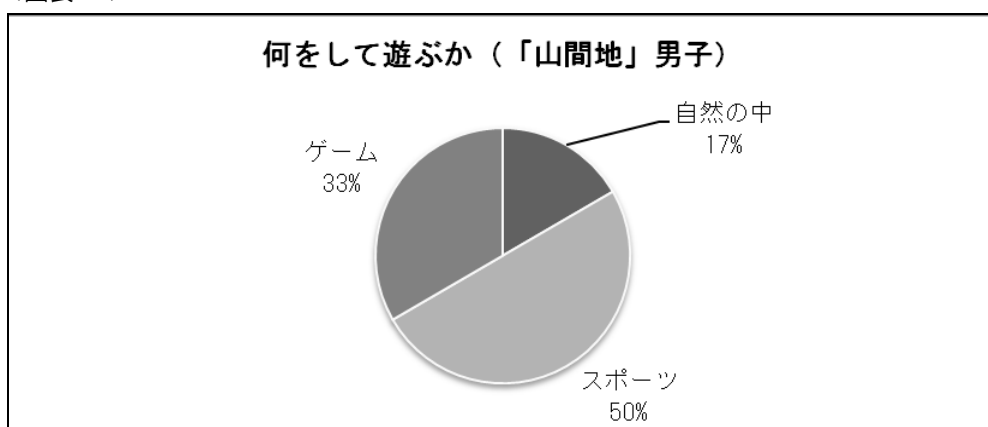


(1) 例えば、厚生労働白書平成15年版、25頁。

<図表 11>



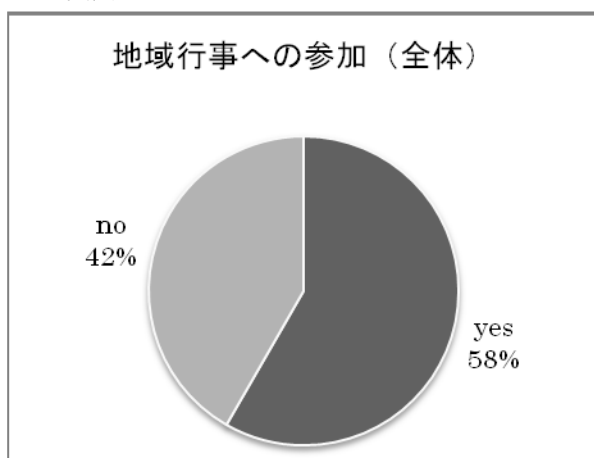
<図表 12>



子どもたちは、お祭りなどの地域行事にどの程度参加しているのだろうか。

全体で 58%が参加していると答えた<図表 13>。伝統行事については、その伝承のため、学校でも特別の計らいを行っているはずであるが、この数値は、果たして多いと言えるのだろうか。意外にも、「市街地」の男子の参加率が、67%と高く、むしろ「山間地」の男子の参加率が低い（50%）。ときがわ町の地域行事には、大野、梶平、日枝の各神社で行われる「ささら獅子舞」という伝統行事のほか、地域住民の実行委員会形式で行われる、「西平の里山まつり」、「花菖蒲祭り」、「木のくにときがわまつり」

<図表13>



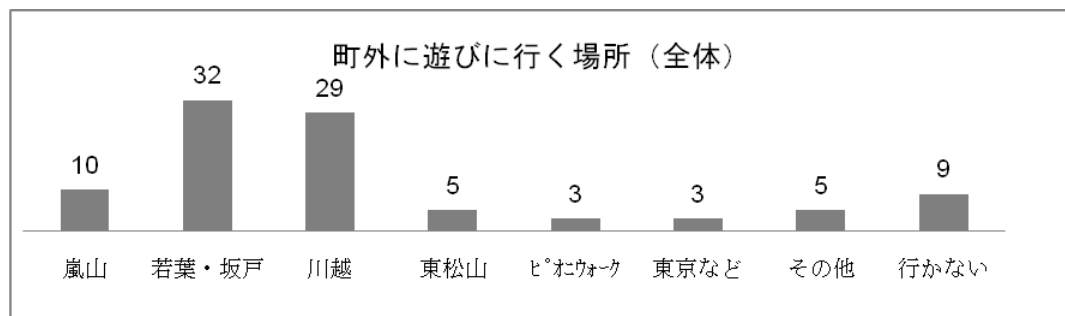
などがある。伝統行事に比べると実行委員会形式の祭りは、一般住民が参加しやすい。伝統行事が主に山間地域で行われていることも、影響しているのかもしれない。

(3) アンケート結果の概要2 — 町外のどこに遊びに行くか

日常生活圏以外への子どもたち同士による、いわゆる「お出掛け」は、子どもたちの自立心を育てる意味で、大人への一里塚といえよう。中学生になると、大抵の親が、友達同士で町外に遊びに行くことを許す。それは、子どもたちにとって良かれ悪しかれ、大きな刺激となっているに違いない。ときがわ町の中学生たちはどこに出かけていくのであろう。

予想した通り、男子と女子では、行く先がかなり異なっていた。遊びの目的も男子は、多くがゲームか映画であるが、女子は映画もあるものの買い物・ショッピングが多い。

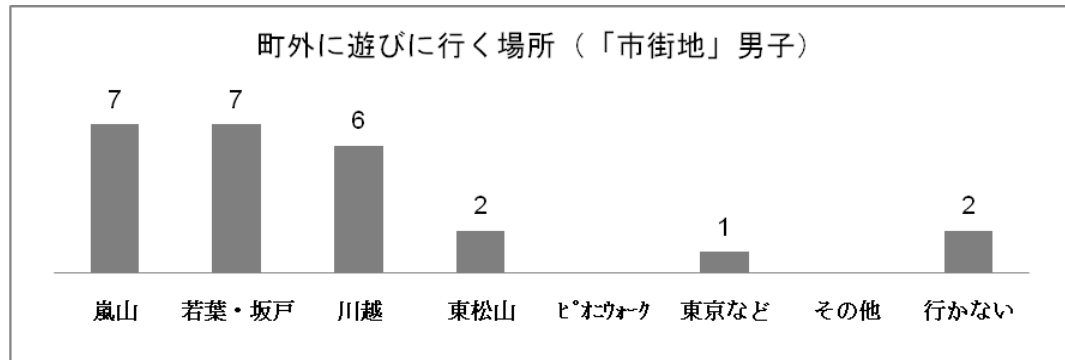
<図表 14>



*複数回答のため、数値は回答者数よりかなり多い。

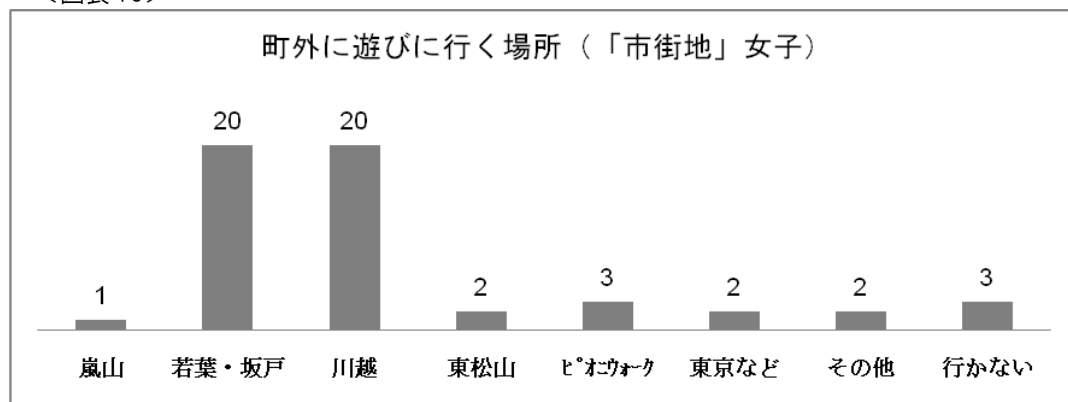
これらの傾向は、特に「市街地」の男女生徒に顕著に表れている。「市街地」の男子生徒は、7人が「嵐山」を挙げており、若葉・坂戸、川越と肩を並べている<図表 15>。目的は「ゲーム」であろうか。

<図表 15>



一方、「市街地」の女子は、20名もが、「若葉・坂戸」と「川越」を挙げた<図表 16>。これらの地域が、女子たちのショッピングの場なのではないか。ピオニウォークとは、東松山市（高坂駅）に2010年に開店した大型のショッピングセンターであるが、「東松山」という回答も実際には、このショッピングセンターを指しているのかもしれない。

<図表 16>



しかし一方で、町外のどこへも行かない生徒の存在にも注意が必要であろう。「町外へは行かない」等と答えた生徒（無回答を含む）は、全体で14.5%であったが、「山間地」では、少人数ではあるものの男女とも25%であった<図表 17>。

<図表 17>

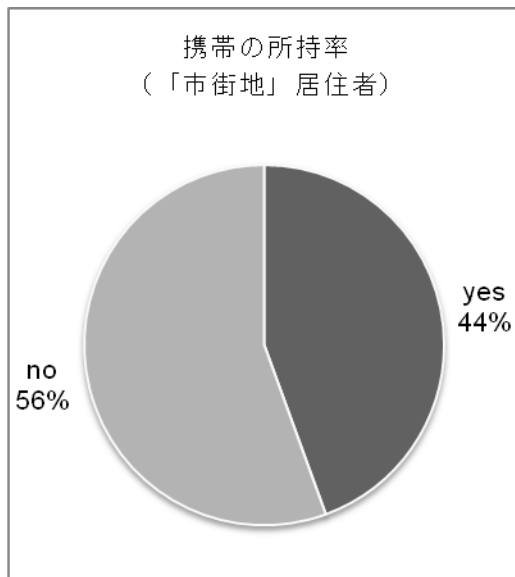
「町外へは行かない」と「無回答」の生徒の比率

	居住地区	「町外へ行かない」と「無回答」	全体	割合
男子	「市街地」	2	21	9.5%
	「山間地」	3	12	25.0%
女子	「市街地」	3	25	12.0%
	「山間地」	1	4	25.0%
全体		9	62	14.5%

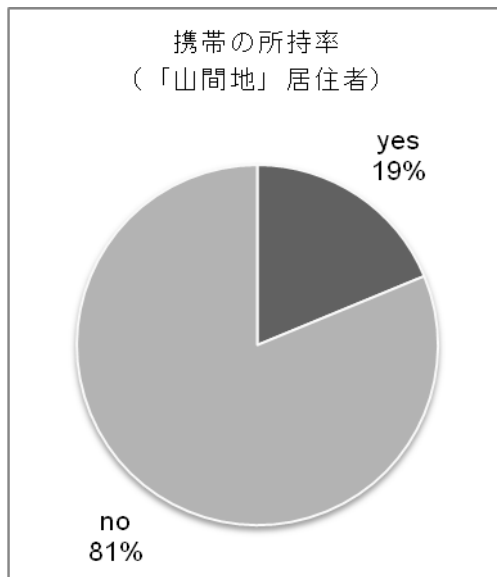
（4）アンケート結果の概要3 — 携帯の所持

携帯の所持状況についても、今回聞いた。中学生の携帯所持については、賛否両論あるもののまだ議論は定まっていない、と言えるだろう。学校裏サイトなどの弊害が発生している一方で、通学などの安全性から親が所持させる場合があるからである。生徒たち本人にとってみれば、友達同士の連絡が容易となることから、所持希望が強い。ただ実際に持てば、電話としてだけでなく新たな情報ツールとなるため、所持、不所持の間にデジタル・ディバイド（情報格差）が生まれる。全体の所有率は、37.7%で、4割弱だが、「市街地」居住者と「山間地」居住者のあいだで所持率に倍以上の開きがあるのは気になる。

<図表 18>



<図表 19>

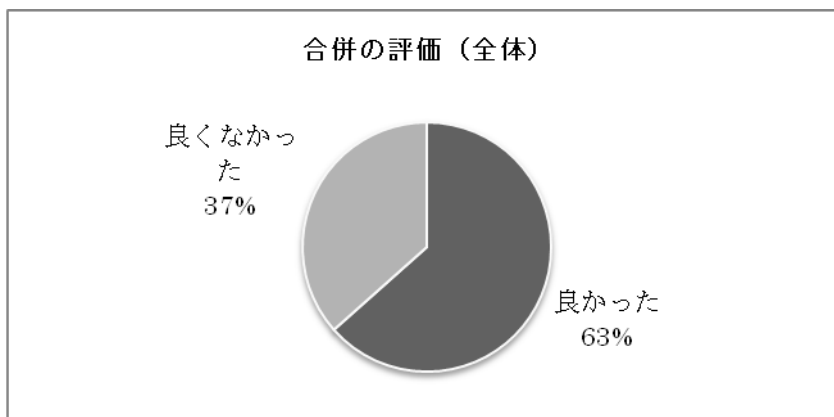


（5）アンケート結果の概要4 — ときがわ町の不満、合併への賛否

中学生たちに、ときがわ町について、不満なところも聞いている。「交通の不便さ」と「商店の少なさ」についての不満が圧倒的である。「山間地」居住者の不満は、全員がその二点であったが、「市街地」居住者の不満は、その二つのほかに街灯の少なさ、遊ぶところの少なさも挙がっていた。条件が一定程度充足されれば、今度はほかに不満が広がっていく。人間の欲求は尽きることがないが、中学生でも同じであろう。

二村の合併については、全体としては悪くない反応である。しかし、なぜか女子は、12：11と賛否半々であった<図表 20>。

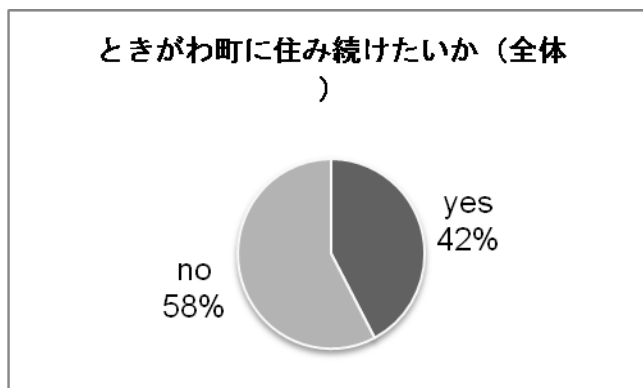
<図表 20>



(6) アンケート結果の概要5 — ときがわ町に住み続けたいか、将来の夢

最後に、中学生たちが「ときがわ町に住み続けたい」と思っているかどうか、を見てみることにしよう。全体として、残念ながら「NO」が58%を占めた。

<図表 21>



「no」の理由は、多くが「不便」であることを挙げているが、一方で、「yes」、つまり住み続けたいとする理由は、ほとんどが「自然が豊か」であることを挙げている。つまり、ときがわ町の現状をまったく正反対に評価して、「住み続けたいかどうか」を判断している、というわけである。

もともと、将来の夢、つまり、なりたい職種によっては、町には留められないということもあるだろう。今回のアンケートでは「将来の夢」についても聞いている<図表 22>。

<図表 22> 「将来の夢」への回答(全体)

	スポーツ選手など	看護師	保育士	その他	教師・公務員	特にない	無記入
男子	7			6	1	10	7
女子	1	4	3	9	2	6	2
合計	8	4	3	15	3	16	9

確かに、スポーツ選手や、看護師などを目指すとなると、地域内に職場を見つけるのは難しいであろう。アナウサーやデザイナーになるのであれば、都会に出ていくことを選択せざるを得ない。しかし、「特にない」と回答した人、や無記入だった人は、合わせて25名もいて、全体の40%も占めている。実際、スポーツ関係の仕事や看護師を目指していても、「住み続けたい」と答えている人が複数いる。(それらの「夢」を持ち、かつ「住み続けたい」と答えた人：助産師1、看護師1、保育士2、スポーツ関係5)。

むしろ、「住み続けたい」かどうかは、地域固有のもの(例えば、自然)に深い愛着を感じているかどうかではないか。「住み続けたいか」どうか、と「ときがわ町の好きな場所」がどこであるかに、関係がある、と思えてならない。

前述のように、今回のアンケートで「ときがわ町の好きな場所」を尋ねたが、そのうち自然系を答えた人は、「住み続けたい」と答える傾向があり、公共建物系を答えた人は「no」と答える傾向にあった。

〈図表 23〉 「ときがわ町の好きな場所」と「住み続けたいか」のクロス集計

	ときがわ町の好きな場所	回答数	回答のうち、「住み続けたいか」について	
			yes	no
男子	自然系	13	10	3
	公共建物系	12	2	10
女子	自然系	18	9	9
	公共建物系	11	3	6

たとえば、男子でみると「ときがわ町の好きな場所」に「山の中」「森」や「本郷に流れている川」のように自然系の場所を回答した人は13名であったが、このうち10名（77%）は、「住み続けたい」と答えている。男子の約半分の12名は、公共建物系を好きな場所と答えたが、このうち「住み続けたい」と答えたのは2名（17%）に過ぎなかった。

改めて述べるまでもなく、公共的な建物に問題があるということではない。それらがなければ、暮らしに満足はいかないし、場合によっては暮らしが立ち行かなくなるかもしれない。しかし、他の地域にも代替可能なものがあるかどうか、といえ、可能なのではないか。都会へ行けば、より素晴らしい建物があるかもしれない。その点、地域の自然は、他にはない。深い愛着を感じざるを得ないものがあるように思える。

5. 最後に

今回のアンケートは、前述のように島田ゼミが現地で行ってきた活動の副産物である。2010年夏、ときがわ町大柵地区の14軒のお宅に25名の島田ゼミの学生がお世話になった。その際、多くの御家庭で、若者が住み続けないことへの寂寥感が聞かれた。また、同時に、自然豊かで面倒見のよい地域であることから、子育てに適した環境にあることへの誇りも聞かれたところであった。しかし残念ながら、自然豊かな環境は、子育てに関して言えば、必ずしも活かされているとは言い難いのではないか。

もちろん、一回だけのアンケートで結論を出すのは誤りであろう。ただ将来に向けて、何らかの材料を提示しているように思えてならない。たとえば、こうした地域の子どもたちと都会の子どもたちが、自然の中で一緒に遊ぶことはできないのだろうか。この地域の子どもたちは、きっと都会の子どもたちに自慢するものがあるだろう。都会の子どもたちも、家の中や教室では見せることのない、活力と才能を発揮するに違いない。また、そこに大学生たちが混ざって、子どもたちの遊びをうまくコーディネートできれば、さらに面白いことができるかもしれない。山遊びも川遊びも、グレードアップすることだろう。

自然は、おそらくわれわれ人間にとって、掛替えのない賜物である。そのことを、小さなうち

から身をもって知ることは、大袈裟に聞こえるかもしれないが、人類の永続性のために必要なことと思えてならない。自然は愛おしく、壊せば二度と元には戻せない、そのことを知ることが、今はとても大切だということである。

本報告は、アンケート用紙の作成から分析に至るまで、島田ゼミの学生たち（2008年入学）の協力によっている。とりわけ、池田遼、平林政彦の両君の力がなければ、このアンケートはできなかった。

最後になりましたが、このアンケートの実施にあたりご協力いただいた皆さんにお礼申し上げます。都幾川中学校久米校長をはじめとする教員の皆さん、戸口教育長、企画財政課荒井淳さんをはじめとするときがわ町役場の皆さんにお世話になりました。また、島田ゼミのときがわ町における活動については、NPO 法人・ときがわ山里文化研究所に、大変お世話になっています。深く感謝いたします。

